

十七日午後三時、在留民の移動完了と同時に中国軍人に対する自由外出許可が発令された。中国人民は長かった日本軍による威圧から、やっと解放された。その歡喜の姿は、私の眼底に、深い印象を刻みこんだ。

敗戦の実体実状という実感が私の全身をおおった。領事館警察の最後の任務は終わったのである。

敗戦の思い出

東京都 中河義雄

私は中支派遣軍、弾部隊、師団通信隊無線帯隊の一員として、昭和十九年九月より終戦まで中支の各地を転戦したが、終戦はちょうど作戦が終了して、漢口に集結しているときであった。

終戦当時は、未だ武器を持っていたので、中共軍（當時は八路軍といった）の攻撃を受けることもなく、北上し、集結地である北支の済南市郊外白馬山に着いたのは十月であった。

十二月に入って、蔣介石軍に依頼され、昭和二十年の大晦日、二十一年の元日は、中共軍の交戦中で迎えた。

終戦となり、われわれは本国へ帰るまで、臨時の雇われ兵での戦闘なので、誰もが戦死、負傷したくないので、士気は低く中共軍とは比較にならなかった。

棺桶に火薬をつめ、火をつけて三、四人が一輪車で押してきて、人と共に爆発し、城門を破るのである。日本の爆弾三勇士そのものであった。そして戦闘は激烈を極め、日本軍にも多数の戦死者、負傷者が出たのである。

昭和二十一年一月、白馬山で武装解除されたが、白馬山より日本への乗船地である青島までの間、武器が無いため、非常にみじめな思いをしたのである。

それは後述しますが、武器が無いため、心細い出発であったが、それでも日本へ帰れるというので、皆張りきって白馬山を出発した。

隊長の説明では、青島までの地域は中共軍の占領地と重慶軍の占領地が交錯しているので、汽車で行けるところは汽車で行き、通れぬところは徒歩で行進するということであったが、最初は、一般邦人と共に汽車の無蓋貨

車すし詰めで済南を出発した。

一般邦人の女性は、頭を坊主刈りにして、兵隊と同じ軍服を着ていたが、子ども達は、そのままであった。邦人達は奥地より出発するときは、金目の物ばかり一輪車に満載して、二人も三人も持って出発したそうだが、盗まれたり、食糧と交換したり、売り食いのため、済南から出発する時は、私共も同じく、リュック一個だけであった。

列車進行中、突然銃声がして列車はとまった。そして、前より伝令が来て「各分隊腕時計を一個ずつ出せ」という。

分隊長は、真っ先に腕時計を出し、列車は動き出した。一時間近く走ったら、又銃声で列車は止まった。今度は「各分隊毛布を一枚ずつ出せ」という。

そして又毛布を出して列車は動いたが、中共軍の占領地近くで、列車はとまり、今度は行軍することになった。中共軍は軍律が厳しく、毛布を十枚ぐらい渡したと、記憶しているが、われわれを護衛してくれたし、宿舎の割り当てもテキパキとしてくれた。

そして又重慶軍の占領地に入った。ここからわれわれの苦しみが始まった。隊長がいうには、状況が非常に悪い。一般住民の感情が悪いので、四列に隊を組み、中の二列に負傷者、病人、一般邦人を入れ、外側は強い者、元気な者で横四人が腕を組んで歩くということになった。歩き出したらその意味が分かってきた。中国人は竹竿の先端に日本カミソリをくくりつけ、それを振りまわす。又、鉄のカギを竿の先端にくくりつけ、それでリュックサック、帽子、等を引っかけて四列の隊列から引きずり出し、寄ってたかって裸にする。

私の隊の者も何人かはやられたが、さいわい、軍服だけは取られずに済んだ。

私共も自衛のため、外側の者は、棒を持って歩くことにし、カミソリ、竿カギの連中と戦いながら行進した。

行進中大きな川が数か所あった。

さいわい乾期なので、水量も少なく、一人ずつ通る。長さ四十〜五十メートルぐらいの仮橋が掛けられてあった。この川を渡るときがたいへんであった。

渡る前に何百人か集結し、一人ずつ仮橋を渡るのであ

るが、先にわたる者は何事もないたため、病人一般邦人等を渡した。残りが二十〜三十人ぐらいになったとき、二百人ぐらいの中国人が一せいにおそってきた。棒と棒、カミソリ、鉄カギで大乱闘となるのである。そして日本人何人かは命を落した。帰国連中であり、本人達もほんとうに残念であつたろうと思う。

私達はそれを川中島の合戦といつて戦つた。しかし考えて見れば思えばこのように住民の反日感情が強く、われわれ武器を持たぬ者を襲うのは、最初この大陸に進入してきた日本の軍隊が住民にひどいことをしたための怨みなのか、日本軍の占領下で商売した商人に対する怨みなのかはわからないが、まったくひどいものであつた。又終戦後、雇われ戦争で、又日本へ引き揚げ途中で戦死し、負傷した人達もそうとうあつたのである。このよ
うな戦いを毎日しながら夜は屋根はあるけれども、窓も何も無い家の土間に天幕を敷いて寝るのであるが、北支の一月は寒く、横になって寝るのであるが、トロトロして目がさめると土についている下半分は冷たく感覚が無くなつており、上の暖かいほうを下にするが、すぐ又感

覚が無くなつて、浅い眠りしかできないかつた。

又食糧も乏しく、われわれもギリギリで少量のものしか食えなかつたのが、特に一般邦人はひどく、二歳より五、六歳の子供一人と麦粉七、八升を交換して食う母親、自分の身体を中国人に売つて三人の子供を養う母親、その他さまざま場面を見るにつけ、教養等関係のない、人それぞれの赤裸々な人間像が生きたための極限の時にこそ見えるものであるということがわかつた。まったく地獄絵を見る思いであつた。そしてようやく青島に着いた。

青島の市街地に高島屋のデパートがあつた。そして、その窓から中国兵がたくさん顔を出し、つかれ切つたわれわれを見て笑つていた。又製鉄所の日本人社宅に中国兵がたくさんいてこちらを見ていた。営々としてこの大陸に日本人たちが築きあげた財産も、この戦争によつていっさいを失つてしまつたのである。